

## 論 文 要 旨

学位論文題目 浅井了意と仏教——仏書における典拠と仮名草子との関わりに注目して——

氏名 木村 迪子

本論は近世前期に活躍した仮名草子作家・浅井了意の仏教的性格に注目してその著述活動を仏書・出版・仮名草子の三方向から捉え直す。

第一章では特に了意の仏書について、その典拠解明を基軸に検討を行った。

第一節では『無量寿経鼓吹』の典拠として『大経抄』・『大経直談要註記』を明らかにし、また本書と浄土宗所依文献を介在させた浄土宗教学との関係を指摘した。一方で、真宗聖教については『四十八願取滴直談』との本文比較により一部に利用が確認できたが、書名などの明記は見付けられなかった。

第二節では『阿弥陀経鼓吹』の典拠について考察した。本書では浄土宗文献の利用は確認できなかった。真宗聖教については、『存覚法語』の利用が認められるも、やはり書名の明記はなかった。

第三節では『観無量寿経鼓吹』の典拠を明らかにした。本書では『観経疏伝通記』・『伝通記糅鈔』を典拠に指摘した。真宗聖教の利用は見出すことが出来なかった。「浄土三部経鼓吹」における以上の調査結果を受けて、筆者は了意が真宗聖教を使えなかったのではないかと推定した。これは、第一に当時真宗教団が聖教利用を制限しており、また第二に了意が東本願寺に所属する学僧ではなかったことを指摘できる。そして更に、了意が若年期に叔父の本山出奔により一家もろとも宗派追放の憂き目に遭って苦渋を強いられた経験から、教団内で禁忌に触れないよう自己防衛を働く必要があった可能性を指摘した。

第四節では「浄土三部経鼓吹」刊行後の了意の浄土宗所依文献の利用について、『往生拾因直談』と『大原談義聞書鈔句解』を取り上げて検証した。「浄土三部経鼓吹」では所謂〈古註〉を用いていたが、『往生拾因直談』では当代の学僧である貞準の『往生拾因新鈔』を典拠の一として用いていることが分かった。『大原談義聞書鈔句解』でも、羊歩の『大原談義再三鈔』など、近代註の利用があった。『大原談義聞書鈔句解』には了意が生前に板行した仏書としては唯一、真宗聖教の明確な利用を認められたが、これは寧ろ、該書と真宗教団との無関係を強調するための引用と見做せた。了意が真宗聖教を明確に用いていなかったという事実から、筆者は現在了意作とされる『説法法語鼓吹』と『五願鈔文意』についての存疑を提言した。

第二章では『密厳上人行状記』、『愚迷発心集直談』の諸本ならびに典拠調査を通して了意と仏書の出版との関係を考察した。

第一節では真言宗新義派の開祖・覚鑿の伝記である『密厳上人行状記』を取り上げた。諸本調査の結果、該書は初印の段階で序文を附さなかった可能性が高いことが明らかになった。また、典拠調査の結果、当時写本でしか流通していなかった『大伝法院本願上人縁起』を典拠の一に用いていることも突き止めた。これは新義派の学僧らの心証を損ねたと見えて、智積院の運徹は『行状記』板行後に覚鑿伝を含む『結網集』を板行しているが、その序文では『行状記』を無視する態度を取る。この、他宗派の題

材を巡る一件は平仮名本『因果物語』を巡る一件に通じる。

第二節では『無量寿経鼓吹』における覚鑿伝の典拠考察を行い、了意がその典拠に『太平記』を利用していることなどを踏まえ、彼が覚鑿について積極的な捉え方をしていなかった可能性を指摘し、これも新義派の反発の一因となったのではないかと考えた。

第三節では覚鑿偽撰の『孝養集』について、近世における板本伝播を探ることにより、本書が真宗に縁の深い板元から刊行されてきたことを明かした。

第四節では了意の『愚迷発心集直談』（『直談』）を取り上げた。『直談』刊行前、『愚迷発心集』の既刊注釈は『愚迷発心集思連鈔』と、それを利用したと考えられる『頭書愚迷発心集』のみであった。しかし、『思連鈔』と同じ真言宗系統の未刊行テキストを典拠に用いたと思しき了意の『直談』は『思連鈔』の独壇場を覆す。『直談』刊行に触発されてか『思連鈔』の作者・守元は改訂増補版『愚迷発心集寄講』を上梓する。一方で、やはり『直談』の影響を受け、これを典拠に用いた弾松軒（山雲子）の『愚迷発心集和談抄』も成立した。『直談』の刊行により、『愚迷発心集』註釈の出版状況は大きく変わったと言えよう。また、『行状記』同様、『直談』も序文を附さない。了意の仏書中、少なくとも序文を附さない物は他に『善悪因果経直解』と『聖徳太子伝暦備講』を指摘できる。了意が著した仏書の一部に作者名が伏されていた可能性について、これに明らかに板元が関わっていると考えられることから、了意による真宗聖教の自発的な忌避意識以外にも板元による外的な規制があったことを指摘する。

第三章では了意の仮名草子について、彼の仏書との重複記事との照合を行っての読解を試みた。

第一節では『安倍晴明物語』における法道仙人譚を取り上げた。従来、本書は『篋篋抄』を典拠とし、古浄瑠璃『しのだづま』の典拠となったとする説と、『しのだづま』と『晴明物語』の両書が先行する別の一曲を典拠とする説との二説があった。法道仙人譚の再検討と、『観無量寿経鼓吹』に収録される晴明伝承に割注された「晴明伝記」なる一書への言及を踏まえ、『晴明物語』に『篋篋抄』、『元亨釈書』以外に『晴明伝記』なる未見の一書が典拠として存在したのではないかと指摘した。

第二節では『法花経利益物語』巻一の典拠考察を行った。結果、巻二以降について岡雅彦が典拠として指摘している『法華伝記』の利用が、巻一にも及んでいることを明らかにした。更に『法華伝記』に該当しない箇所について、『阿弥陀経鼓吹』における共通典拠を比較することで、了意が仏教的な観点から〈翻訳〉を重要視していた可能性を指摘した。

第三節では『葛城物語』の道昭による虎化導譚に注目した。従来、本章段は『元亨釈書』を典拠とするとされてきたが、同様の説話を収録する『本願直談鈔』・『無量寿経鼓吹』、両書を用いて本文比較を行うことで、『葛城物語』には『元亨釈書』以外にも浄土宗系直談類の影響を認められることを指摘した。

以上、了意の著述を仏教的な視点から捉え直すことで、了意の著述に関する作者側と板元側の二方向からの自主的規制意識の働きを指摘し、更に了意の仏教的思想背景が仮名草子作品へどのように影響したかについても明らかにした。